

表音文字の非表音性：サハ語と現代韓国語の対照を中心に*

Degree of phonological correspondence in phonetic writing systems: Contrasting the writing systems of Sakha and Modern Korean

江 畑 冬 生
EBATA Fuyuki

This paper provides a contrastive analysis on the writing systems of Sakha and Modern Korean. Both languages use a phonetic writing system and exhibit rich patterns in their morphophonemic alternation. In spite of this similarity, the two languages show difference in the degree of how phonetically consistent with morphophonemic alternation. The orthography of Sakha tries to be phonetically consistent, while that of Modern Korean tends to be consistency in indicating morphemes.

キーワード：正書法，サハ語，現代韓国語，形態音韻交替，形態素

Keywords: Orthography, Sakha, Modern Korean, Morphophonemic alternation, Morpheme

0. はじめに

河野 (1994) は、表音文字の表音機能は手段に過ぎないのであり文字の本質は表語にあるのだという議論を行った。本論文ではこの考えを踏まえて、サハ語と現代韓国語の表記を対照する。両言語は、正書法において表音文字を使用している点および形態音韻的交替が豊富である点において共通する。しかしながら両言語を対照した結果、サハ語の正書法はあくまで表音的であろうとする性質を持つと言える一方、韓国語の正書法では（ある意味では表音性を犠牲にしても）形態素の標示において一貫性を保とうとする傾向が強いということを主張する。

第1節では、サハ語正書法における表音性の高さについて、ドイツ語やロシア語における同様のケースと対比しながら示していく。第2節では、河野 (1994) を引用しながら、文字の本質は表語性にあることを確認する。第3節では日英仏語の例を挙げながら、表音文字が必ずしも表音的に用いられないケースがあることを示す。第4節および第5節では

* 本研究は、科研費（課題番号 17H04773 および 16KK0026）による成果の一部である。本論文のサハ語のデータは、筆者によるフィールドワークにより得られたものである。本論文は、第70回新潟大学言語研究会（2017年2月24日）における口頭発表の内容に加筆したものである。

韓国語における様々なタイプの音韻交替を検討し、韓国語では形態素の標示において一貫性を保とうとする傾向が強いと主張する。

1. サハ語正書法における表音性の高さ

サハ語の表記には（改変）キリル文字を用いる。サハ語には、規則的ではあるが見かけ上は複雑な形態音韻規則が存在するため、形態音韻交替が頻繁に起こることを特徴とする（詳しくは江畑 (2005) などを参照されたい）。

交替の1つに、語末子音の有声化がある。表1に示すように、サハ語では有声化の際に表記を変えるが、対照的にドイツ語やロシア語では表記を変えていない（以下本節では、「正書法」「音韻表記」「日本語訳」の順に例を示す）¹。

[表 1] 語末子音の有声化における表記法

	語末無声子音	語中有声子音
サハ語	сүк /sük/ 「背負え」	сүгэн /sügen/ 「背負って」
ドイツ語	Tag /ta:k/ 「日（単数）」	Tage /ta:gə/ 「日（複数）」
ロシア語	друг /druk/ 「友（主格）」	друга /druga/ 「友（属格）」

サハ語における別なタイプの交替として、語末子音の逆行同化がある。次の(1)と(2)では、サハ語の *as* 「食べ物」と *at* 「馬」を比べる。例が示すように、*as* 「食べ物」では接尾辞が付加しても語幹の形が変わらない。一方で *at* 「馬」の場合には、語末子音 /t/ が逆行同化し /k/ に後退している。*at* 「馬」におけるこの交替は、語幹を構成する2つの音素のうち1つが他に置き換わることを意味する。語幹だけを見た場合、/at/ と /ak/ が同一の形態素であることを判断しなくてはならないことになる²。

- (1) *ac* /as/ 「食物が」 *ac-ka* /as-ka/ 「食物に」 *ac-par* /as-par/ 「私の食物に」
 (2) *ar* /at/ 「馬が」 *ak-ka* /ak-ka/ 「馬に」 *ap-par* /ap-par/ 「私の馬に」

次に検討する複子音語幹（語幹末に2つの子音を持つ）の場合には、交替がより複雑になる。以下では(3)の単子音語幹（語幹末に1つの子音を持つ）と対比させる形で、(4)(5)

¹ なおこのような場合に、сүк /sük/ の語末子音に基底 {g} を立てる分析には問題がある。異形態における交替形（無声子音・有声子音・鼻音）を持つ子音始まりの接尾辞が後続する際に、сүк-тэ /sük-te/、сүк-пүт /sük-püt/ のように無声子音が現れるからである。

² 筆者が新潟大学で行っているサハ語文法の講義における経験からも、逆行同化の生じた語幹 /ak/ を見て辞書の /at/ の項目を見る必要があることを、理屈上では分かったとしても初学者が実行するのは難しいことが分かる。

に複子音語幹の例を示す。これらの例はいずれも、語幹の形（命令を表す）、過去形、継起副動詞形の順に並んでいる。

- | | | | |
|-----|------------------|-------------------------|-------------------------|
| (3) | эп /ep/ 「足せ」 | эп-пит /ep-pit/ 「足した」 | эб-эн /eb-en/ 「足して」 |
| (4) | кэрт /kert/ 「切れ」 | кэр-пит /ker-pit/ 「切った」 | кэрд-эн /kerd-en/ 「切って」 |
| (5) | илт /ilt/ 「運べ」 | ил-пит /il-pit/ 「運んだ」 | илдь-эн /ilž-en/ 「運んで」 |

(4)の「切る」は基底に{*kert*}を立て、過去形では阻害音脱落の、継起副動詞形では阻害音有声化のプロセスを想定する必要がある。(5)の「運ぶ」でも基底に{*ilt*}を立てたうえ、過去形では(4)と同様に阻害音が脱落する。しかし継起副動詞形では単なる有声化ではなく、破擦音/*z*/への交替規則を立てなければならない³。

このようにサハ語では、種々の形態音韻規則が働くために語幹が音形をしばしば変える。ただしいずれの場合にも、サハ語の正書法では基底ではなく表層音を示している⁴。つまりサハ語の正書法は表音性が極めて高いと言える。

2. 河野 (1994) による文字の本質と表音性

河野 (1994) は、文字の本質は表語性の中にあり、表音文字の表音性は手段に過ぎないと主張する。河野 (1994) の主張を最も良く表す部分を以下に引用する。

文字はあくまで書かれたものを読む手段であって、意味の理解が究極の目的である。それには意味を担う語を手掛かりとしないわけにはいかない。文字の表音は語を知る一つの手段であって、表音を目的とする IPA とは自ら別の物である

河野 (1994: 22-23)

ひと口に表音文字といっても、その表音性は一様でない。第1節で示したサハ語の表記は、表音性が極めて高い。一方で例えばアラビア語では、部分的にしか母音を表記しない。日本語の仮名は、一見したところでは表音性が比較的高いように思える。ところが「高校」(こうこう)や「経営」(けいえい)はその仮名が示すような読みをしないし、「パーティ」「ヴェルディ」「トロフィ」などでは、(長音記号が無くても)語末音節が長音で読まれる。つまり仮名も、言語音を100%そのまま表してはいない。「15」[dʒu:go]と「銃後」[dʒu:ŋo]のような(一部の日本語話者にとっての)音韻的対立も、仮名では書き分けることができ

³ ただし複子音語幹の命令形は、しばしば流音を欠いた/*ket*/、/*it*/としても発音される。これらの場合には表記が表層音を表していないことになる。

⁴ サハ語の正書法は1929年に制定され、1939年に現在の形に改められた。これ以前にも書記資料が存在し、最初期のものはBöhntlingk (1851)である。いずれの書記法も表音性の高いものになっている。

ない。またしばしば見過ごされがちな点として多くの言語では母音の長短やアクセント・イントネーションを表記しない（できない）ことも、表音文字の非表音的な側面に数えることができるだろう⁵。次節では、日英仏語の事例を取り上げ、表音文字が必ずしも表音的に用いられていないケースのいくつかに関して検討していく。

3. 日英仏語に見られる非表音性

本節では日英仏語の事例を用いて、表音文字も非表音的に用いられることを確認する。さらにそれらの例が、河野 (1994) のいう「表語性」と関係するだけでなく「表形態素性」とでも呼べるような性質を持つことを示す。

英語の *knight* 「騎士」や *knee* 「膝」、あるいは *write* 「書く」や *wrong* 「誤った」等の初頭子音は遅くとも 17 世紀までに消失したため [中尾 (1985: 423) による]、音としては読まれない（なお *ch* や *sh* は 2 つの子音で 1 つの音を表すため、これらとは事情が異なる）。ここで表音文字が表音的でないのは歴史的な理由による。この表記は結果として、*night* 「夜」や *right* 「右」等の同音意義語との弁別にも役立っている。

フランス語では、音として読まれない文字が比較的多い。表 2 の *aimer* 「愛する」の例が示すように、動詞の語尾において読まれない字が特に顕著である。

[表 2] フランス語動詞の活用

aime	aimont
aimes	 aimez
aime	 aiment

* 太字は読まれる部分

[表 3] ラテン語動詞の活用

amō	amāmus
amās	amātis
amat	amant

* 太字は強勢の置かれる母音

表 2 が示すように、*aimer* 「愛する」の 1SG, 2SG, 3SG, 3PL はすべて同音となる⁶。ここで留意したいのは、「語末 *ent* を読まない」のようなルールがあるわけではないことである。例えば *vraiment* /vremɑ̃/ 「本当に」や *content* /cotɑ̃/ 「満足した」の語末部分 *ent* は、/ɑ̃/ の音を有する。つまり語末 *ent* は、動詞の場合に限り形態素（主語の人称・数）を標示している。

フランス語では、*livre* /livʁ/ 「本」のような単複、*noir* /noʁ/ 「黒い」のような男性・女性の区別においても、太字部分は無音である。これらの表音文字が表音的でないのは歴史的な理由による。これらの表記は結果として、形態素の標示に役立っている。

⁵ なおサハ語は一型アクセント言語であるので、強勢の位置は予測可能である。その点でも（結果的にはあるが）サハ語表記の表音性は高い。

⁶ 河野 (1994: 21) にも、フランス語の動詞語尾における 3 人称単数と 3 人称複数は正書法上でしか区別されないことへの言及がある。

河野 (1994: 21) が言うように、日本語の助詞「は」「へ」「を」についても、表音的ではない代わりに形態素の標示に役立っていると言える。

4. 現代韓国語表記における非表音性と形態素標示機能

本節では、現代韓国語の表記における非表音的な事例を紹介しながら、現代韓国語の表記では形態素を標示する傾向が特に強いことを示す⁷。

サハ語同様、韓国語も形態音韻交替の多い言語である。本論文では韓国語における交替を、形態素固有交替（特定形態素にのみ生じる）・形態音韻交替（形態素境界で生じる）・統語音韻交替（語境界で生じる）の3つに分類する。以下の議論では資料として、李翊燮（他）(2004)・石賢敬 (2013)・野間 (2000)・前田 (2016) からの例を用いている。例を示す際にはハングル表記に加え、{} 内に転写を、// 内に音韻表記を施す（転写には文化観光部 2000 年式を、音韻表記にはそれをわずかに改変したものをを用いる⁸）。

(A) 形態素固有交替

形態素固有交替としては、文字의 {ui}の読みが挙げられる。文字의 {ui}は語頭では/ui/として読まれるが⁹、語頭以外では/i/に交替し、助詞「の」の場合では/e/に交替する。このうち/e/への交替はこの助詞以外の場合には生じない。このように音韻的条件に依らず、特定の形態素にのみ生じる交替を形態素固有交替と呼ぶことにする¹⁰。

[表 4] 文字의の読み

語頭 /ui/	語頭以外 /i/	助詞 /e/
의회 {uihoe} /uihoe/ 「議会」	회의 {hoeui} /hoei/ 「会議」	의 {ui} /e/ 「の」

(B) 形態音韻交替

韓国語では形態音韻交替が多く、結果としてハングル表記と実際の発音の間に隔たりが

⁷ 本節で扱う言語は、その地理的・歴史的広がりを考慮し「朝鮮語」と呼ばれることも一般的であるが、本論文では現在の大韓民国における正書法（1988年1月制定）に議論を限定するため「韓国語」と呼ぶ。李基文（1975: 254）にも述べられているように、韓国語正書法に形態音韻的原理が働くことそれ自体は良く知られている事実である。野間（2010: 171）では韓国語正書法の形態音韻的な性格を、「形態音韻論」「音節構造論」「音韻論」の3つの平面の三層構造として捉えている。なお金東昭（2003: 148）によれば、中世朝鮮語では音素的表記が行われていた。

⁸ ここで言う改変とは具体的には濃音の表記にアポストロフィを用いることを指す。

⁹ ただし語頭でも의사「医者」のように/eu/の発音が聞かれることもある。

¹⁰ サハ語にも、与格接辞の異形態のような形態素固有交替と見なせる現象が存在する。

生じる事が多い. 기억-력 {**gieok-ryeok**} 「記憶力」のように, 表層的には鼻音の無い環境でも「鼻音化」が起こり/**gieong-nyeok**/のように発音されるケースもある. ただし現代韓国語の表記においては, 交替があろうとなかろうと, 形態素の表記を一貫させる傾向にある. 以下ではサハ語の(3)~(5)と対応させる形で, 韓国語の単子音語幹と複子音語幹の例を示す.

[表 5] 単子音語幹・複子音語幹における形態音韻交替

単独形・辞書形	母音後続	鼻音後続
옷 { os } / ot / 「服」	옷이 { os-i } / os-i / 「服が」	옷만 { os-man } / on-man / 「服だけ」
값 { gaps } / gap / 「値」	값이 { gaps-i } / gaps-i / 「値が」	값만 { gaps-man } / gam-man / 「値だけ」
없다 { eops-ta } / eop-t'a / 「ない」 (辞書形)	없어 { eops-eo } / eops-eo / 「ない」 (終止形)	없느 { eops-neun } / com-neun / 「ない」 (連体形)

表 5 に示すように, 韓国語では基本的に母音後続の環境に合わせた表記を行い, 語幹部分が表記通りに読まれない場合であっても語幹の表記を変えない¹¹. つまり, サハ語の場合とは対照的に, 韓国語はある程度表音性を犠牲にする代わりに形態素の標示を一貫させている.

(C) 統語音韻交替

韓国語では, 語境界を挟んで音韻交替が生じることがある (この種の交替を「統語音韻交替」と呼ぶことにする. 管見の限りではこの術語を用いた先行研究は無い). この交替は名詞に動詞または形容詞が後続する環境等で生じうる.

¹¹ 形態音韻交替のうち, 濃音化と/n挿入に関しては若干の問題がある. 李翊燮 (2004: 118) では 불고기 /**bulgogi**/ と 물고기 /**mulk'ogi**/ などの例を示し, 同様の音韻的環境において常に濃音化が生じるわけではないため, 濃音化の生起条件は未解明だとしている. 前田 (2016: 65) では, 同じ分節音から成っていても 발병 /**balbyeong**/ 「発病」では濃音化が起こらず 발병 /**balp'yeong**/ 「足の病」では濃音化が生じることを指摘する. 前田 (2016: 46) では/n挿入に関しても, 물약 /**mullyak**/ 「水薬」(水+薬)では/n挿入が起こる (さらに/l交替も起こる) が 한약 /**hanyak**/ 「漢方薬」(漢+薬)では挿入が起こらないことを指摘する. 濃音化や鼻音化などの形態音韻交替は, 漢字語内部でも生じる. 漢字語内部で交替が起こることは, 1字漢字が (自立用法が無くても) 形態素同様の資格を持つことを意味する. この見方は, 中期朝鮮語や現代慶尚道諸方言のアクセントに関しても 1字漢字が形態素同様に振る舞う点とも合致する (福井 (2013: 205) では 1字漢字が「漢字形態素」と呼ばれる). 日本語に関しても, 影山 (1993: 13) では, 1字漢字は形態素相当であり「帰国」や「建築」のような 1字漢字の組合せによる漢字語は複合語と見做すべきだという議論を行っている.

- (6) 밥 먹다 {pap meokta} /pam meokt'a/ 「ごはん食べる」
 (7) 밥 맛있다 {pap masissta} /pam masitt'a/ 「ごはんおいしい」

語幹末に{s}/t/を持つ名詞あるいは不可能のㅁ{mos}/mot/に母音始まりの動詞が後続する場合、有声化して/d/が現れる。表5で示したように、形態音韻交替では同じ環境で/s/を出力する。従って、形態素境界と語境界では異なる音韻規則が働いていることが分かる¹²。

- (8) 옷 입다 {os ipt'a} /od ipt'a/ 「服着る」
 (9) 못 오다 {mos oda} /mod oda/ 「来れない」 (不可能+来る)

以上のように、韓国語に見られる音韻交替には3つのタイプがある。形態音韻交替では、同一の語幹であっても後続の形態素の初頭音により出力が異なる。形態音韻交替と統語音韻交替では、同じ環境でも表層音の出力が異なる場合がある。現代韓国語の表記においては、これらを表音的に書き分けることはせず、形態素として一貫させた表記を行っている。

これとは逆に、形態素としての一貫性が失われたために表記を変えたと思わせる例がある。韓国語では、動詞または形容詞を否定する際には副詞안 /an/ を前置する：안 가다 /an gada/ 「行かない」(否定+行く)，안 먹다 /an meokt'a/ 「食べない」(否定+食べる)。

ところが이다 /ida/ 「だ」の否定形아니다 /anida/ 「ではない、違う」(形態上は否定の안 /an/ + 이다 /ida/ 「だ」の組み合わせ)は例外的に一語として表記され、否定部分の音節末音 /n/ が次の音節の初頭音として表記される。これは次の2つの理由により /anida/ 「ではない、違う」がもはや一形態素化しているためと思わせる：[1] /ida/ が単独では使用できない拘束形態素であるのに対し、/anida/ は自立的な動詞でありそのみで文を形成できる。[2] /ida/ は名詞語幹に直接後続する(母音語幹に後続する際には /i/ が脱落することがある)のに対し、/anida/ は主格助詞を伴った名詞語幹に後続するのが普通である(つまり [X가 anida] 「Xではない」の形を取る)。

5. 韓国語表記の表音性をめぐるいくつかの問題

1 字漢字の初頭子音/r/は、語頭では表記されないが語中では表記されるため、前節で述べた形態素標示の一貫性の原則からは外れることとなる：요리 {yori} /yori/ 「料理」と 무료 {muryo} /muryo/ 「無料」。ただし/n/挿入(とそれに伴う鼻音化)が起こる際には、表記を変えない：한국요리 {hangukyori} /hangungnyori/ 「韓国料理」。

¹² 辻野(2013)では、朝鮮語の形態素境界において生じる/n/挿入が、後行要素に一定程度の自立性が認められる際に生じるのだと結論付けた。この場合には、ある音韻現象が一律に「形態素境界」において生じるとは言えない。

前節で述べた音韻交替は規則的であるので、表音性を犠牲にした表記を行っても大きな問題は生じないと思われる¹³。しかしながら不規則かつ散発的な交替に関してはこの限りでは無く、表層音に合わせて表記自体も変えてしまうことがある。例えば数詞の육 {yuk} /yuk/「六」と십 {sip} /sip/「十」は, 십육 {sipyuk} /simnyuk/「十六」の場合には交替が生じても表記を変えないが, 유월 {yuwol} /yuwol/「六月」および시월 {siwol} /siwol/「十月」では表層音に合わせてそれぞれ第1要素である数詞の音節末子音表記を落としている。

興味深いことに同様の形態素の組み合わせであっても、一方が形態音韻交替を、他方が統語音韻交替を示すペアが存在する。例えば맛있다 {masissta} /masitt'a/「おいしい」（「味」＋「ある」）では形態音韻交替を示すが, 맛없다 {maseopsta} /madeopt'a/「まずい」（「味」＋「ない」）では統語音韻交替を示す。他にも몇월 {myeochwol} /myeodwol/「何月」（統語音韻交替）と며칠 {myeochil} /myeochil/「何日」（形態音韻交替）というペアがある。

「何日」の場合には、表層音に合わせた表記改変（つまり第1要素の音節末子音を第2要素の初頭子音として表記）も行われている¹⁴。

本論文の第4節および第5節では韓国語表記とその表音性に関して、主として子音に関する考察を行ってきた。一方で母音に関しては、表音性が比較的高いと言える（以下の例では語幹と語尾をハイフンにより分けて示す）。例えば오다 {o-da} /o-da/「来る」の継起形は와서 {wa-seo} /wa-seo/「来て」となる。このように語幹における交替に応じて表記を買えることが行われる。ただし字母のつくりの性質のためもあり、形態素標示も完全には損なわない結果となっている¹⁵。

6. まとめ

本論文では、形態音韻的交替の豊富さを特徴とする2つの言語（サハ語と現代韓国語）を対照した。両言語を対照した結果、サハ語正書法は形態素標示の一貫性を犠牲にしてでも表音的であろうとする性質を持つと言える一方、韓国語正書法では表音性を犠牲にしてでも形態素標示の一貫性を保とうとする傾向が強いということを主張した。両言語の相違点は、端的には次ページの表6のように示すことが可能である。

さらに本論文では、現代韓国語の形態音韻的交替を3つのタイプに分類した上で検討を

¹³ ただし辻野 (2017) は、若年層話者における/n/挿入と漢字語の流音後濃音化を取り上げ、基本的には規則的なのは韓国語の音韻現象に共時的変異が著しいことについても指摘している。

¹⁴ 本当に「同様の音韻環境」と呼べるのかどうか、さらなる検討を要する。ここに挙げた2つのペアではいずれも、後部要素の初頭が/i/の場合に形態音韻交替が起こり、それ以外の母音の場合に統語音韻交替が起こっている。関連して第4節で論じた鼻音化でも、後部要素の初頭が/i/または/y/の場合に限って生じるルールが存在する： 한국요리 {hangukyori} /hangungnyori/「韓国料理」と 한국음식 {hangukeumsik} /hangugeumsik/「韓国飲食」。

¹⁵ 日本語の連濁はこれと似た現象とも見なせる。例えば「たな」「はこ」に対する「ほんだな」「ほんばこ」は表音的表記でありながら、形態素の標示機能も部分的に認められる。

行った。形態素固有交替・形態音韻交替・統語音韻交替いずれの場合にも、現代韓国語の表記においては形態素として一貫させた表記を行っている。形態音韻交替と統語音韻交替では、同じ音的環境でも表層音の出力が異なる場合がある。また形態素としての一貫性が失われた場合には、表層音に従って表記を変えたと見なせる例もある。

〔表6〕 サハ語と韓国語における表音性の違い

	表記レベル	音韻レベル
サハ語	{at} 「馬が」 : {ak-ka} 「馬に」	/at/ 「馬が」 : /ak-ka/ 「馬に」
	{ker-pit} 「切った」 : {kerd-en} 「切って」	/ker-pit/ 「切った」 : /kerd-en/ 「切って」
	表音的であるが表記上では一貫しない	
韓国語	옷 {os} 「服」 : 옷이 {os-i} 「服が」	옷 /ot/ 「服」 : 옷이 /os-i/ 「服が」
	값 {gaps} 「値」 : 값이 {gaps-i} 「値が」	값 /gap/ 「値」 : 값이 /gaps-i/ 「値が」
	表音的ではないが表記上では一貫する	

参考文献

- Böhtlingk, Otto N. (1851) *Über die Sprache der Jakuten. Grammatik, Text und Wörterbuch*. St. Petersburg. [Reprinted in 1963, Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, vol. 35. The Hague: Mouton.]
- 李翊燮・李相億・蔡琬 (2004) 『韓国語概説』(前田 真彦 (訳)) 大修館書店.
- 李基文 (1975) 『韓国語の歴史』(村山 七郎 (監修)・藤本 幸夫 (訳)) 大修館書店.
- 江畑 冬生 (2005) 「サハ語 (ヤクート語) の接尾辞付加における交替」『東京大学言語学論集』 第24号, 11-40.
- 影山 太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 金 東昭 (2003) 『韓国語変遷史』(栗田 英二 (訳)) 明石書店.
- 河野 六郎 (1994) 『文字論』 三省堂.
- 石賢敬 (他) (2013) 『韓国語活用辞典』 高橋書店.
- 辻野 裕紀 (2013) 「言語形式の自律性と音韻現象 —現代朝鮮語の〈n挿入〉を対象として—」『朝鮮学報』 第229輯, 1-32.
- 辻野 裕紀 (2017) 「現代朝鮮語の形態音韻論的現象に見られる共時的変異について」『音声研究』 21(2), 116-126.
- 中尾 俊夫 (1985) 『英語学大系 11 音韻史』 大修館書店.
- 野間 秀樹 (2000) 『至福の朝鮮語』 朝日出版社.

野間 秀樹 (2010) 『ハングルの誕生 音から文字を創る』 平凡社.

前田 真彦 (2016) 『韓国語の発音変化完全マスター』 HANA.

福井 玲 (2013) 『韓国語音韻史の探究』 三省堂.